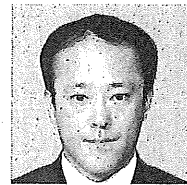


# 脳を知る

□■164



小倉光博准教授

このコーナーでは、読者からのご意見、関心のあるテーマを募集しています。〒640-8154 和歌山市六番丁43ハピネス六番ビル 産経新聞和歌山支局（FAX 073・435・3018）までお寄せください。

厚生労働省の試算では平成37年に認知症患者は700万人、つまり65歳以上の5人に1人が認知症になると報告されています。認知症は脳の働きが全体的に落ちてくる状態をいいますが、複雑な脳の機能を正確に評価して、どの程度悪ければ認知症と診断するのかは、その簡単ではありません。

一回の認知症テストで点数が基準より低いから認知症と診断できるような鋭敏な検査はないですし、ましてや脳のMRIなどの検査は補助診断として参考になりますがそれだけで診断できるものではありません。認知症ではないのに間違って認知症と診断され、投薬治療まで受けていたケースが多いとの報告もあります。

和歌山県立医大の認知症センターを受診した人のうち40％は認知症ではありませんでした。そのうち約半数が年齢相応の正常であり、20％が軽度認知障害と診断されました。結果的に認知症ではなかった人も物忘れを心配して受診されていますが、認知症とは、記憶、思考、見当識、理解、計算、学

習、言語、判断など多数の脳機能の障害からなる症候群です。記憶低下だけでは認知症とはいきません。しかし、認知症ではなくても軽度認

知障害と診断された場合は注意が必要です。軽度認知障害とは物忘れは強いものの、それ以外の症状がなく、認知症ではないが正常とも言えない、つま

## 軽度認知障害 正常とは言えないグレーゾーン



り白でも黒でもないグレーゾーンの状態を指します。問題はこれらの人が認知症に移行する危険性が高いということです。

これらの人の中には「引退し仕事をする必要もなく、家事もせず趣味もなく、特に何もすることもなく、したいことも興味もない」といった生活をしている場合や、「自分や自分を取り巻く周囲の環境が変わり、精神的肉体的に楽しく快適な生活を送れなくなった」などといった環境要因が引き金になっている例が多く認められます。

認知症では脳神経細胞がどんどん死滅することにより脳機能が低下するわけですが、それだけではなく環境要因も重要です。なぜなら脳は使わなければ衰えます。何も考える必要がない、あるいは考えたくもないとなれば、当然記憶力など脳機能も衰えてきます。そういう人が軽度認知障害という段階を経て本当の認知症になってしまいます。

物忘れが多くなったと思ったら、自分の生活を見直してみてください。（和歌山県立医科大学 脳神経外科准教授 小倉光博）

「脳を知る」は次回から金曜日付に掲載します。